大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文概要集 2013 年 2 月

非血縁者同士の共同生活にみる居住者の関係性と空間の使われ方に関する研究

A Study on the Human Relations and How to Share the Living Space in the Communal Living between Unrelated

建築計画分野　　林一樹

地方の漁村集落には、厳しい漁業での連帯感を深めるために、若者同士が四畳半一間で身を寄せ合いながら寝泊まりをする若衆宿という制度が根付いている。都市部においても、単身赴任者が朝食を共有することから近隣関係が創出され、活発なコミュニティが生まれている住まいが見受けられる。本研究では、このような非血縁者同士で住むことの本質が内在する住まい方の実態を、居住者の関係と空間の共有の仕方から明らかにする事で、形骸化されたシェア居住の見直しを図る。

In the fishing village, there is the custom named “Neyako” that youths sleep while huddled in a four-and-a-half tatami-mat room to provide and unit for harsh fishery. On the other hand, in urban, there is the collective housing with a thriving community that job bachelors are running in the park and eat breakfast together every morning. In this study, to reconsider shared housing that has become a dead letter to clarify such a way of living that essence of communal living between unrelated is inherent from the point of view the human relations and how to share the living space.

1. 研究の背景と目的

現在のシェア居住物件数は 1,133 件まで昇り、5 年前の 259 件から約 4 倍に急増している [1)]。都市部においては若者同士のルームシェアのようなシェア居住が流行しているが、それを始めるきっかけの大半は、「家賃にまつわる経費が経験される」「寂しくなった時誰かが居ると安心する」といった理由が多く [2)]、彼らと同居人との人間関係において、非血縁者同士で住むことの実質的な意義は見出しにくい。このように形式化されたシェア居住は住人同士のトラブルや疎遠化という問題を生み、シェア居住という住まい方自体が形骸化される。

本研究では、非血縁者同士の共同生活という観点で、漁村集落の若衆宿や都市部の単身赴任アパートなどに着目する。それらの人間関係や空間の共有の仕方の実態を把握し、血縁関係には見られない独自性を評価する。その上で、シェア居住という住まい方を拡張できるような価値や視点を提示する。

2. 各調査対象の概要と調査方法

本研究ではシェア居住を拡大解釈し、非血縁者同士の共同生活を「日常生活行為 [3)](入浴、衣服の着脱、トイレの使用、移動、排泄、食事など)を 1 つの場で共有しながら居住すること」と定義する。

1) 調査対象と調査方法

さまざまな居住者属性およびシェアの形態をもつ調査対象を選定し(表 1)、調査方法を表 2 に示す。

2) 寝屋子制度

制度の内容　答志島の漁村集落である答志町特有の慣習で、かつては西日本の漁村全体で行われていた。中学校を卒業した長男が同級生で 5 人程のグループ(寝屋子)を作り、血縁関係のない仮親(寝屋親)の家で寝泊まりする制度。起源は、数名が 1 つの漁師の網元をやり、若い衆を 1 カ所にまとめ、いつでも漁に向かえるように備える為というのが一般的である。現在では、漁師に就かずに高校へ進学する若者や島外に働きに出る若者も多い為、漁のみの為の制度ではなくなり、昔と比較すると中身は変容している。

寝屋子について　長男が中学 2 年生の中(終)盤にな

表 1　調査対象の概要

調査対象	所在地	建物種	居住者の関係	共用部
寝屋子制度	三重県鳥羽市	戸建	青年・夫婦	寝屋親(仮親)の家
甲子ドミトリー	大阪府吹田市	集合	学生・中高齢者	風呂、炊事場、トイレ、洗濯室等
カイラーサ	名古屋市北区	集合	単身赴任者	食堂、厨房
しまんと荘	大阪市港区	集合	障害者	居間、食堂、風呂、トイレ等

表 2　調査方法

	寝屋子制度	甲子ドミトリー	カイラーサ	しまんと荘
ヒアリング	寝屋子 寝屋親 元寝屋子	オーナー 管理人 居住者	オーナー 居住者	事業主 ヘルパー
観察調査	若者の 1 日	共同風呂	共同食堂	居住者の外出
アンケート	――	――	居住者	――

ると、同級生の実親同士で集まり、寝屋親の候補を探し始める。候補が決まると寝屋親にお願いに行き、承諾してもらえば寝屋子の結成となる。寝屋子の一般的な生活は、夕食後に各自が寝屋親の家へ向かい、寝屋親と居間で仕事の話等をした後、2 階の寝屋子部屋へ上がって行き、その日の夜を過ごす。翌日は各々学校や仕事へ向かう。かつてはこれが毎日行われていたが、現在では週末のみ、長期休暇や盆・正月のみに変容している。また、他にも寝屋子同士は葬式において密な助け合いを行い、不幸事にあった当人が喪主であっても何もしなくてよい。解散については、25 歳前後か、結婚により徐々にメンバーが抜けていく形で自然に泊まりに行かなくなる。その後は寝屋子朋輩となり、朋友会(同級生や旧友も加入)を結成して、寝屋子の関係は一生涯継続していく。

寝屋親について　候補となる人は 1.夫婦であること 2.地域の人々に信頼のある人格者 3.部屋に余裕のあること等を条件に選ばれる。独身・片親や無職の者が選ばれることはない。寝屋親は寝屋子の第 2 の親となり、仕事の相談をする、答志のしきたりの教える、悪事を厳しく叱る等の教育をする役割もある。また、寝屋子が結婚した際の仲人も務める。

3) 甲子ドミトリー

建物の概要　関西大学の隣に立地している築 43 年の単身者専用アパートである。銭湯のような共同風呂をもつことが特徴であり、個室以外に水回りは一切無く、物干し場まで共同である。

居住者について　元々は学生寮であったが、現在は学生と中高齢者が混在しており、ほとんど男性である。中高齢者は社会人として入居してからリタイアしても住み続けており、単身で住まざるを得ない事情を抱えた者も多い。学生は大学 3, 4 回生の入居者が大半である。共同風呂等で学生と高齢者の交流が日常的に見られる。

4) カイラーサ

建物の概要　名古屋市北区にある単身赴任専用アパートである。特徴としては、本館の 1 階に共同食堂や厨房、居間が配されており、営業という形で隣地に住んでいるオーナーによる手作りの朝食(週 5 回)と夕食(週 3 回)が提供される。また、各部屋は適度な広さが確保され、全ての水回りが完備されている。

居住者について　40~70 代の男性単身赴任者で、50 代が大半である。同じ会社に勤めていないため、利害関係や年功序列が発生せず、住人同士で毎朝付近の名城公園でランニングを行う等、独自の活発なコミュニティが形成されている。

5) しまんと荘

建物の概要　住まい方はグループホームに分類できるが、個人事業主による賃貸コレクティブ住宅として計画されている。甲子ドミトリーと同じく、個室以外は全て共用部であり、建物全体がバリアフリー化されている。

居住者について　8 部屋中 5 人が入居しており、全員車椅子で生活する障害者である。住人は障害者年金等の公的な助成金により、個々でヘルパーを雇っている。ソフト面でも自立する仕組みができており、1 人で地域に積極的に外出する居住者も見られる。

3. 共同生活の実態

1) 寝屋子制度の実態

日常生活　寝屋子らは日々共に寝泊まりする中で、兄弟や親では話しにくいような恋愛や仕事等の悩み事を相談し合っている。また、泊まる頻度に決まりは無く、朝は実家の母親が起こしに来ることもある。

寝屋親との関係　寝屋親は仕事(漁)の相談や道徳の指導を行い、寝屋子と親子のような関係に近づいていく。また、他人の親に預かってもらっているという恩義から、寝屋親に叱られても寝屋子は反抗しない。物事に対して違う視点をもち、寝屋親がいることで社会勉強になる。

冠婚葬祭　寝屋子の親類等の葬式がある場合、当人は何もしなくても、仲間内で全ての金銭を負担し、仕事も担う。答志では 10 年ほど前から土葬から火葬

表 3　寝屋子の現状(平成 24 年度)

組数	全人数	1 組の平均人数	1 組の最多/最小	最年長	長男	次男	島外生活者
9 組	46 人	5.11 人	7/4 人	26 歳	42 人	4 人	26 人

表 4　寝屋子の組・人数の推移

年	1964	1994	2002	2008	2012
組数	20 以上	14	13	11	9
全人数	90 以上	——	——	66	46

表 5　各建物の概要

	甲子ドミトリー	カイラーサ	しまんと荘
部屋数	90 室	本館 37 戸 別館 6 戸	8 室
居住者数	49 人(管理人 2 人)	本館 34 人 別館 5 人	5 人
入居開始年	昭和 44 年	平成 6 年	平成 14 年
構造	RC 造 4 階建て	RC 造 5 階建て	S 造 3 階建て
間取り	1R	1DK	1R
専有面積	7.5~10.0 ㎡	32.4 ㎡	16.0 ㎡
家賃(共益費)	18,000～21,000 円 (4,000 円)	78,000～88,000 円 (5,000 円)(本館)	50,000 円 (4,000 円)
管理形態	管理人(住込)、不動産	事業主、会社契約	事業主、運営会社

図 1　しまんと荘の平面図(1, 2～3 階 S=1:350)

になった為、葬式も簡素化し、変容しているが、現在でも助け合いは行われている。また、寝屋子が結婚すると、実親と寝屋親の 2 組で仲人を務める。さらに、答志の青年は 15～25 歳まで青年団に加入し、祭りの運営等を行っていく(図 2)。寝屋子制度が青年団の結束力を高め、祭り成功につながる。

同級生　寝屋子制度には長男という一応の条件はあるものの、次男等も同級生と一緒に寝泊まりをして交流を深める。寝屋子部屋には寝屋子しか泊まれないという厳格な決まりは無く、祭り等の帰省する者が多い時期は、同級生ら仲の良い者同士で集まり、寝屋子を拠点とする。また、島外で働いていた同級生も、リタイアしてから朋友会や同級生の輪に入れてもらい、付き合いを続けている。

地域全体での教育　実親は長男を寝屋子に入れることで、子供の近況を他の寝屋子から聞くことができる。さらに、息子が誰かに頼らずとも仲間同士で問題を解決し、答志を支えていく人間に成長ために、寝屋親に預けようという教育心をもっている。

地縁の形成　かつて寝屋子制度の風習でアネラアソビという娘遊びが行われており、答志の若者は村中の家へ上がり込んでいた。現在では行われていないが、その名残として答志の人々は若者の訪問を歓迎しており、それによって地縁が形成されていく。

2) 甲子ドミトリーの実態

居住者の関係　単身かつ低家賃アパートに住む中高齢男性の事情を察して、学生は深くは踏み込まないが、日常的な挨拶や相手次第では風呂で長時間会話することもある。高齢者同士では頻繁に部屋の訪問を行っている。

中高齢者の学生への注意　学生が騒いでいる等すると、中高齢者は静かにするよう注意し、アパート内の秩序を保つ。それにより学生も近隣に迷惑をかけないよう意識した行動をとるようなる。

共用部の使い方　長期間住んでいる居住者は、新しく入ってきた学生等に対して、共用部の使い方が乱れている場合は、少々乱暴なやり方でも注意・対処する。これにより共用部の使い方にルールが生まれ、綺麗に使われる等の改善がなされる。このように甲子ドミトリーでは、揉め事やトラブルには何らかの

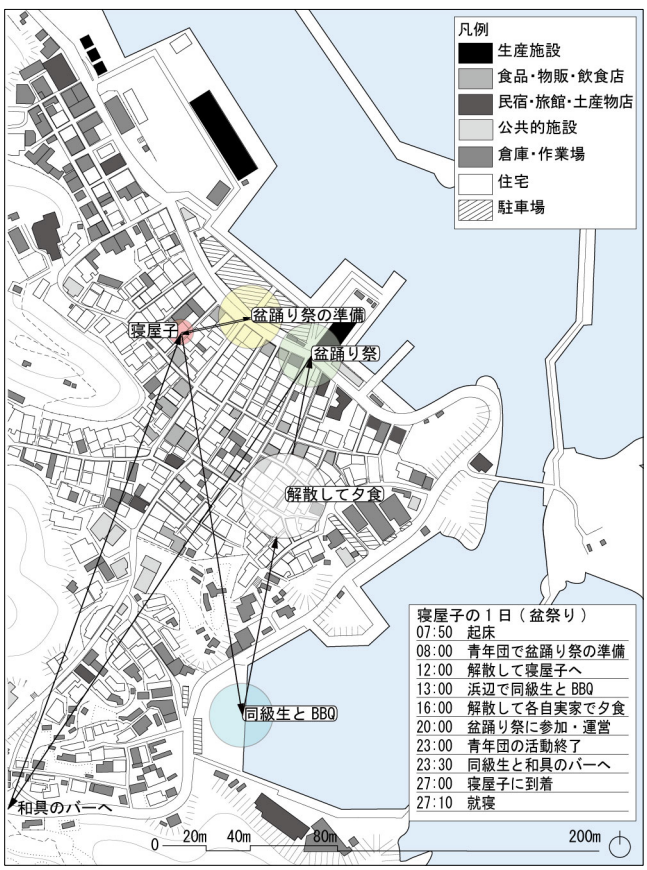

図 2　寝屋子の生活(盆踊り)

表 6　寝屋子制度の実態[( )は発言者]

寝屋子の日常①(寝屋子) やっぱりこう集まることによって自分の悩みを打ち明けて。けっこう悩み事解決とか。例えば恋愛話ね。
寝屋子の日常②(寝屋子) (泊まる頻度の)括りはねぇよなぁ。寝屋子によって「この日休みやもんで、集まろうやぁ。」とか。俺ら別になぁ、毎日ほんと集まって寝とったで。朝になるともう起きて。(実家)のお母さん起こしに来て、毎日。
寝屋子と寝屋親の関係(寝屋親) 昔の典型的な寝屋子っていうのは、子供らがみんな漁師で、そこの寝屋親さんも漁師で、その日沖から上がってきて、自分のとこ実際の家でご飯を食べて、三々五々その寝屋子に寄って来るわけですよね、「こんばんは。」って言うて。そこの寝屋親の親父さんと「今日の漁はどうやった？」「こうこうで。」「そうか、頑張れよ。」っていう話をちょこっとして。ほんで子供らは寝屋子の部屋へ上がってく。
寝屋親の教育(元寝屋子) 寝屋子の部屋ではなかなか内緒では(酒は)飲めんやろう。寝屋子の親父に怒らえて「お前ら何しとんや！」って言うて。未成年の時は寝屋子では飲まんかった。 多分タバコも駄目やった。もう煙が出とるとえらい事や。よう叱られよった。
寝屋親の尊厳(寝屋子) 社会勉強になるんすよ。何て言うんやろ、親では怒られやんことに対して、やっぱり親父の視点が違ったりして。こうものすご怒られて。やっぱりそれは親が甘いっていうか。これは違うなって、自分の中で。
葬式の助け合い(元寝屋子) 楽なもんや。いろいろあってもさぁ、不幸事なんてその当家の喪主としますわなぁ、喪主は何もせんでもええ。喪主はとにかくあの「ありがとう、ありがとう。」と言うとるだけで、もう寝屋子の朋輩が全部やってくれるんです。官に納めるところから墓に埋めるところからもう全部寝屋子朋輩がやると。もう本人はうろたえますわなぁ、あの突然親が死んだとかそんなんで。もう何というか分からん。周りが全部やってくれる。金も払わんでええしさぁ。もう葬儀屋へかかると、かなり金かかるから。仕事もかなりみんな手慣れとる。官に納めるところから。家とか山とかっていうその役の名前があるわけ。家っていうのはさぁ官に納める。山っていうのは墓掘って墓に埋める。
結婚式の仲人(元寝屋子) 寝屋親が 1 組になっとるんですわねえ。ほんであと 1 組は親類の方が。必ず寝屋子を取るとその子供らの結婚式の時は必ず仲人をします。ですから仲人は夫婦でやりまして 4 人ですね。だからもし、家内を亡くしたら仲人はできませんけどね。
青年団と祭り(元寝屋子) 寝屋子のその朋輩の中で青年団長とかそういう役をしますと、寝屋子の朋輩がみんなバックアップするわけです。応援して。祭り成功やっていう。そういうことで協力しますけど。寝屋子が無いと協力してもらえないっていうそういうとこがある。1 人では何もできない。そういう行事はね。
朋友会の結成(元寝屋子) 寝屋子から朋友会ですね。それはもう一生続きます。ほんで、そのうちに 1 つ 2 つ違いの人らが朋友会をグループいろいろ組んで、10 人になったり 15 人になったり。(寝屋子が) つながる、朋友会になったら。朋友会で大きくなっていく。
同級生との関係①(次男) 俺も次男で入ってないけど、入りたかったん。入ってないけど、こう入っとるみたいに接してくれるんで (寝屋子に) 来やすいし。まぁ毎日来てわぁわぁ一緒にするけど。(実家は) まぁ隣やし。ええもんやと思う。連休も帰ってきて、家で寝んとこっちで寝る。
同級生との関係②(寝屋子未加入) わしらな、言うてよそ(出戻り)もんやけどな、この向こう 10 軒両隣言うてな。10 軒あるセコ言うてな、たまたまな、仲良うしてもうとる。ほいで、たまたまこの人らと同級生がもう 1 人おるん。生活が苦しい時には彼らも呼んでくれん。俺もよう行かんから。付き合いせんけど。ある程度生活も続いてきたら、「おい、このセコの旅行に行こか？」って言うて、誘ってもうて。今でこのセコの中入れてもうとる。ほいで旅行も 3 年にいっぺんぐらいいつも行くし。「わぁ～。」言うて、一杯飲める仲間に入れてもうとんねん。これはもう本当にありがたいと思とる。
地域全体での教育①(寝屋子の実父) だんだん兄貴も少ななってくるやろって思うんや、これから。ほんで働く場所もなくなってくやん、この島の辺りは。ほんと俺ら見ても、もう中学高校行ってからさぁ、てんでバラバラになっていって、もう他人みたいな関係になってくと、絶対あかんのさぁ。せっかくこの祭り (盆) になるとさぁ、答志ずっと寄ったときにさぁ、みんなでいろいろと仕事の話とか嫁さんの話とか、いろいろこういう話の場がなくなるんでさぁ。やっぱしみんな来たときに 1 人でポソーッとおってみ、何にも知らんねぇにぃ。やっぱり話の場、情報源やなぁ。
地域全体での教育②(寝屋子の実父) ほいでさぁ、悪いことが何かある場合あるやんか、自分の子供がさ。そうすると子供は家によう言わんやんか、本当の親に。ほいで友達があるとさぁ友達は一応話になる。友達が家に言うてくる。言うてくれるのさ。そやで。友達っちゅうのは非常に大事。言うてくれる。こうこうでこういうしとるよって友達から言うてくるのさ。情報を。ほいでそれが一番ええのうさ。
地縁の形成①(元寝屋子) 昔アネラアソビって言ってお姉さんとこに遊びに行ったんや。「ここに姉ちゃんおるから遊びに行こか。ここに姉ちゃんおるから遊びに行こか。」って寝屋子を出て遊びに行っとった。みんなで寄って。そこの家の親とも話しやがった。姉ちゃんとこに遊びに行ったらまず親と話して、「あーでもない、こーでもない。」って勉強するん。親と話したり。勉強すんのよ。まず行って、「遊ばしてぇやぁ。」っちゅうて入る。「今おらんせん。」って。そしたら、「すまんのう。また遊ばして頼むやあ。」っちゅうて、(戸) 閉めて帰ってくんねんけど。「おーい。」ってまず家に挨拶して、そっから答志が始まるんや。ほんで、「まぁええやぱぁ、2 階におるぞ。遊びに行け。」って。遊ばしてもらったもんや。最初からずーっと上がって行くんやない。まず親に挨拶して。どこの家でも。だからつながりっちゅうんが出来てくる。
地縁の形成②(寝屋子) 言うたら自分らの寝屋子の場合やとさぁ、漁師の家庭でさぁ。ほいでそこの家族の全員漁師しよるわけやんかぁ、親父お母さんだけじゃなくてさぁ。おじいさんとかに「夜飲もや。」っていきなり行ってさぁ、漁師の話いろいろしてもらったりさぁ。昔はこうやった、ああやったとかさ。家おるとそういう会話って無い。

けじめがつき、規範が生まれる。また、各共用部には表 8 のように厳しい生活を支えていく為の住人同士の多様な交流や助け合いが見られる。

高齢者の居場所　家族がいても実家に帰れない者や年金暮らしの高齢者にとって、甲子ドミトリーは離れられない居場所として機能している。同じような立場の住人が居る心地良さも感じている。

他者への気遣い　仕事等の生計を立てる上で生じる多少の迷惑行為に対しては、誰も咎めず、近隣への細かな気遣いが見受けられる。このような他者の生活事情の考慮は、住人の間で特に話し合いも行われず、自然に共有されている。

3) カイラーサ

朝食の実態　カイラーサでは食堂で朝食を提供する時に、住人が厨房に顔を見せた後、食事の準備ができるとスタッフが大声で名前を呼ぶ。それがいつも同じ時間帯に来ている顔見知りの住人の名前を覚えるきっかけとなる。

表 7　甲子ドミトリーの実態[( )は発言者]

居住者の距離感①(学生) みんながみんな仲良いという訳じゃないですね。やっぱりその事情がある人がいっぱい居るんで。全く喋らない人とかいるんですよ。挨拶しても全く声掛けてくれない人とかもいれば、お風呂で会ったらしょっちゅう喋る人とか。会ったらもう帰れないぐらい長く喋られたりとかっていう方もいるし。
居住者の距離感②(高齢者) 居住者の距離感言うたらほとんど、誰かがしょっちゅう（部屋に）入ってくるんね。(中略)よそさんは来ませんね。ここの人間同士。学生の知り合いの人…学生は今までずっと知り合うとった人はみんな卒業してしもうてな。新しい人はちょっとねぇ、縁遠いけどねぇ。
中高齢者の注意(学生) 階ごとにやっぱり全然雰囲気が違うんですよね。4 階はとにかく静かにしようっていう。怒る方がいつも一緒の方なんですけど。(中略)でもその人とみんなが仲悪いかっていったら、そんなことないんですよね。僕もだからいろいろ喋るし、何か良いお父さんじゃないですけど、そんな感覚で僕は思ってますね。だってバカ騒ぎすんのなんてあんまよろしいことじゃないじゃないですか。でも学生で一人暮らし始めたらやっぱみんな呼んでね、飲んだりとか騒いだりとかしたいっていうところを、何かこうちょっと抑えてくれてるじゃないですけど。そういうぐらいの感覚で僕は今受け取ってますけど。だから良い人やなって思ったりとか。怒り方も「うっさいんじゃ、お前！」って言うよりかは、「夜やねんから、他のみんな寝てるから静かにせぇよ。」っていう。「他の人らのこと考えろよ。」って言うような怒り方なんで。(中略) 他の人のこと気にしながら。しかも他の人って別に隣、前だけじゃなくてってことなんで。一番端っこの 20 室先の人らのことまで考えないとダメなんで。
共用部の使い方(学生) (調理用具)ってすぐ洗わないでしょ？まず出来たもの食べてから洗うでしょ、普通は。だから普通やとシンクに溜めといてって形になるけど、共同キッチンやからそれが出来ないんですよ。とりあえず 1 回持って帰るか、もしくはその場で洗うかなんですけど、すごい面倒臭いんでみんな 1 回キッチンに置くんですよ。食べてからもう 1 回洗いに行こうっていう感覚で溜める人が多かったんですけど。それが一時期すごくて、シンクがもう洗い物だらけになったんですよ。それで、それはあかんやろってことで 1 回全部捨てられてましたね。「あれ？」って思って取りに行ったら全く無くて。ほんで下のゴミ捨てて場行ったら僕の食器全部捨てられてるんです。僕以外の他の人らもみんな捨てられてて。ほんで話聞いたらその S さんが「みんなのところやねんから、出来ひん奴の食器は 1 回でもシンクに溜め置きしたら全部捨てとく。」みたいな。「あり得へんな…」って最初思いましたけど。でも今メッチャ綺麗なんでね、それで。置く人誰もいなくなったし、むしろ逆にすぐ洗う習慣ついたし。今になっては良いかなって思ったけど。
高齢者の居場所(高齢者) 僕も足を悪くしてこの間まで入院しとったんよ。ほんで、とぼとぼと歩く稽古をしようみたいなもんでね。まぁヘルパーさんが来て料理作ってくれるし。病院はちょっと間に合えへんし。ここやったらすぐ救急車来てくれるしね。そやから便利やからしゃあないわ。もう一生ここにおらなしゃあないなぁ思ってる。狭いとこやけど暖房ちょっとしただけで部屋あったまるしね。（中略)もう僕にとってここ天国やなぁ。ははは。あと何年生きられるか知らんけど。もうここでねぇ、行き場ないなぁ。田舎へ帰ったら、僕は徳島県の南の海岸よ、津波が来るいうたらもう間に合わんよ。逃げようたって逃げられへんしなぁ。ここは大丈夫や。
他者への気遣い(学生) 何も考えずにすごいアラームうるさい人とかもいますけどね。あの僕の一番端なんですけど、それのさらに端の人、夜中の 3 時にアラーム鳴らすんですよ。僕の部屋まで聞こえますからね。（中略)夜中 3 時に起きるってことはね、なんかそういう仕事してはるんかな。まぁおっちゃんなんですけど。その人はその仕事が無いと生きていかれへんから、それは咎められないです。そんなんも別に特に誰かに教えてもらう訳でもなく。何となく分かるんですよ、何となく分かってるんです。「この人何やってんねやろうな、普段。」って人ばっかりなんですよ。でも何も言わへんってことは何か事情があっておったりとか。僕もだからみんながみんな何してるか分からないんですよ、正直。どんな風に生きてるかとか、このアパートのことどう思ってるかとか。そんなん全然分からないんですけど、多分みんな何かしら居心地の良さがあるんやろうなって思いながら。っていうその雰囲気の中で僕も普段生活してますね。

表 8　共用部の使われ方(甲子ドミトリー)

	行為	物	ルール
風呂	毎回同じ時間帯に会話	風呂用具	次の人に浴槽を譲る
炊事場	お裾分け	電子レンジ お湯	シンクに物を溜めない 夜中は使わない
トイレ	顔を合わせる(高齢者)	―――	―――
洗濯場	―――	洗濯カゴ 洗剤	落とし物の洗剤は各々少しずつ使う 洗濯物は 1h 以内に回収
物干場	洗濯バサミを掛け合う 下に落ちた洗濯物を取り合う	洗濯バサミ ハンガー	―――

コミュニティの実態　カイラーサでは約 3 分の 1 の住人が毎朝ランニングをしており、週末はマラソン大会等へ出場する。さらに、その晩は共同食堂を使い、買い出しから調理まで協力して「晩餐会」を開く。このような活動が毎週行われており、非常に密接な関係を築いている。

共同生活のルール　甲子ドミトリーと同様に、カイラーサにも住人同士の細かな気遣いを前提とした暗黙のルールが見受けられる。料理ができない者は片付けを積極的にやるという行為が自然にできている。

生活の変化　不規則な食事による不健康や家族とのコミュニケーションが疎遠になる等、一般的な単身赴任生活の問題とカイラーサは無縁で、むしろ家族関係が良好化し、健康的な生活を送っている。理想的な単身赴任生活であると言える。

4) しまんと荘の実態

掃除当番　しまんと荘では居住者本人に対して掃除当番の役割が与えられている。ヘルパーに掃除を任

表 9　カイラーサの実態[( )は発言者]

朝食時の名前の点呼(居住者 50 代) 例えば朝って明日の朝もご飯食べる時そうなんだけど、要はお父さんお母さんが必ずご飯を出す時に「誰々さんどうぞ。」って名前を言ってくれるの。それっていうのがものすごく大事で。だから不特定多数の人にサービスを提供してるんじゃなくて、「あんたにご飯を出してる。俺に作ってもらってる。」わけだから。そういう環境があり得るっていうのはなかなかないよね。
コミュニティの実態(居住者) 走る人がいるんですね。大体こうべったりの人たちは、走る人とゴルフをやる人と。あとそういうイベントがあって、月に 1 回くらいイベントをやろうかいっていう感じで。ゴルフも見た通り掲示してるし。土日（実家に）帰らないと人と、ゴルフと走る人は大体重なってるんだけど。朝来てここでだべって、「じゃあ、どっか走ろうかい。」って言って。そこに名城公園があるんで、けっこう良いところなんで、5 キロから 10 キロくらい走ってる。で、みんなシャワー浴びて、食事に行く人は食事に行って、帰って来て夜「晩餐会」って言って。まぁ飲み会。
共同生活の秘訣(居住者 50 代) カイラーサで生活する上で心掛けていることは、まぁルールを守るっていうことだね。ルールとかもそうなんだけどさ、気遣いをするっていうことがやっぱり大前提なわけ。例えばこういう晩餐会の準備をする。この後「撤収」って言って片付けるんだけど、片付ける時にそれぞれの役割みたいなものがね。今日このメンバーだったら、自分は何をやったらいいかとかっていうのも。
生活の変化(居住者 60 代) ハーフ（マラソン）で 2 時間切っちゃったんですよ。最初はね、2 時間 6 分いくつだった。去年まで。だけどね、息子にね、「お父さん元気もらいました。」ってメールもらっちゃいましてね。もうね、自慢したい（笑)。(中略)もしここのマンションに入ってなかったらね、「土日は何してただろう。」とかね。「会社でもつまんないだろうな。」とか。やっぱりこういう（生活の）張りがあるから、こうね、頑張れるというね。

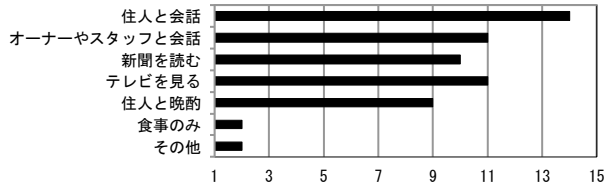

図 3 共同食堂以外でする行為(n=18)(複数回答)

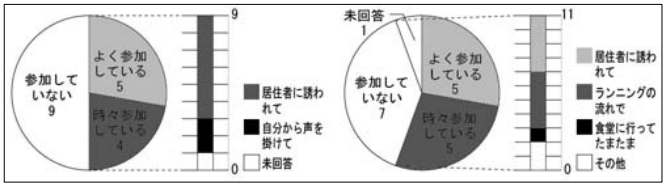

図 4　ランニング・晩餐会の参加人数ときっかけ(n=18)

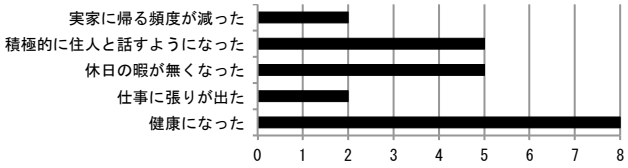

図 5　ランニングに参加してからの生活の変化(n=9)(複数回答)

せることになるが、その時間帯は外出を我慢している。「共同生活の意識」と「自立心の芽生え」が生活指標となる仕組みができている。

ヘルパーの使い方　自分の身体能力や生活状況を考慮しながら、自分に合う事業所を決め、ヘルパーを手配しなければならない。事業所ごとの介助の仕方も異なる為､居住者はヘルパーをコントロールして、自立した生活を送れるように努めなければならない。

居住者の外出実態　居住者は、外出中に街の人に頻繁に声を掛けられる。店舗等でもスタッフとのやり取りは自分で行い、ときには介助してもらっている(図 6)。積極的な意思表示が見受けられる。

サポート体制　しまんと荘では、自立したメンタリティを養える体制が整えられている。複数のヘルパーとの関わり合いの中で、自ら介助体制を築き上げており、事業主もそのような示唆を居住者とヘルパーの双方に行っている。家族や施設のサポートとは異なる細かな仕組みが形成されている(図 7)。

4. 各対象の共同生活の特性と成立要因

各対象の共同生活における居住者の属性・仕組み等、各々の特性の要因を分類して図 8 に示す。

1) 寝屋子制度の特性

寝屋子の共同生活において「若者の教育」と「地縁形成」という 2 点が、制度の変容を受けながらも持続している特性である。寝屋子結成前の子供らが、答志のしきたりを教えてもらい、仲間と助け合って問題解決のできる大人へと成長するために、実親は寝屋親を探し、頼みに行く。そこで若者は、見返りのない地域愛をもち、将来の答志を支える意思が生まれる。若者達を地域全体で教育していこうとする仕組みができている。さらに、漁村集落特有の地域性も、寝屋子制度と関係を持ちながら地縁形成の要因となっており、解散後の朋輩という関係は、寝屋子で培った精神が同級生や向こう両隣 10 軒という単位で拡大していく仕組みとなっている。

2) 甲子ドミトリーの特性

甲子ドミトリーでの共同生活の特性として、学生の自活する意識・高齢者の居場所・自然発生的な集団生活のための規範の 3 つが挙げられる。元学生寮でありながら中高齢者が同居していることが最大の特徴であり、学生はアルバイト、高齢者は年金暮らしなど日々の生計のみで暮らしているような生活状況である。そのような共同生活が学生にとって、自活意識の芽生えへとなる。さらに、身体的な理由や血縁関係の事情を抱えた高齢者にとっての居場所となっている。また、自然発生的な共同スペースの使い方や住まい方の規範は、学生が中高齢者に注意されて気付く場合と中高齢者の生活状況を学生が察知する場合がみられる。学生は中高齢者に直接的にも間接的にも作用されながら、集団生活の感性を磨いていける一人暮らしを送ることができる。

3) カイラーサの特性

単身赴任者という特異な居住者を食事面等で支えるオーナーの役割は非常に大きい。また、共用食堂の空間特性と使い方が会話のきっかけとなる場や交流をしやすい場として機能しており、住人同士の会話時間の増加へとつながる。さらに、会社の異なる単身赴任者という属性が異業種交流を生み、朝食を渡す際に名前を点呼するシステムが、他の住人を認知しやすくしている。さらに、共同生活のルールは全て規定されたものではなく、住人同士が交流していく中で自然発生したものである。同居人は仲間でありながら、妻子と仕事をもつ者同士であることへの気遣い・感性が住人同士の距離を保ち、理想的な単身赴任生活へと結実している。

4) しまんと荘

単身者が空間をシェアして生活しているが、居住者同士の交流や助け合いによって共同生活が成立し

表 10　しまんと荘の実態[( )は発言者]

掃除当番の意義(ヘルパー) 実際はヘルパーという者は利用者が居てて、やっぱりその仕事をして居住者も同行してなきゃいけないんですけど。(居住者)は早く外に出たいもんだから、ヘルパーがまだ仕事終わってないのに出たがりはるんですよね。「(居住者)、これはいけないよ。しまんと荘の掃除は、中のことした後また 1 時間半かかるから 12 時半ぐらいまでかかるよ。」って私言うんです。そしたら「えー。」って言うて。「これはね。家主もいらっしゃるし、やっぱりあなたもちゃんとそれは居なきゃいけません。」当たり前のことなんですよ。「ほんなら僕もそのくらいまで居るようにします。」って。
ヘルパーのコントロール(オーナー) ヘルパーさんに指示していくっていうことができるわけじゃないですか。そうすることでヘルパーさんに自分の思い通りしてもらうためどういうコミュニケーションを取っていくのか。そうしてそれをだんだん身に付けていくうちに自信が出てきて、外行っても勇気が出てくるいうのはあると思いますよ。それはあると思います。(中略)もっと外へ出て行こうとするね、気持ちが芽生えてくるかも分からない。だからまだ可能性はあると思います。だから今外出少ない人は 1 人だけなんで、はい。だからあとヘルパーさんとしか外出できない人はやっぱりメンタリティの問題やね。

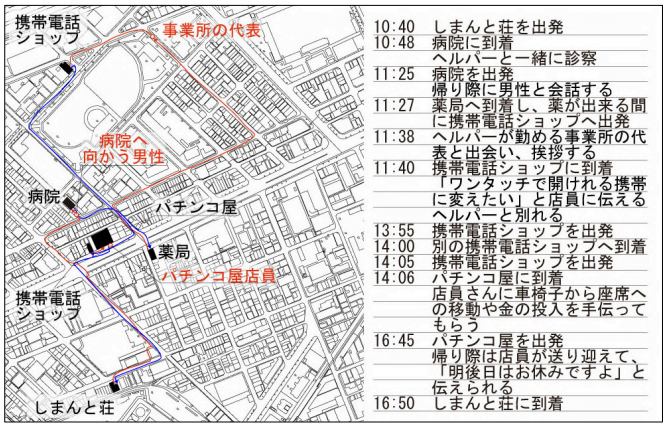

図 6　居住者の外出実態(しまんと荘)

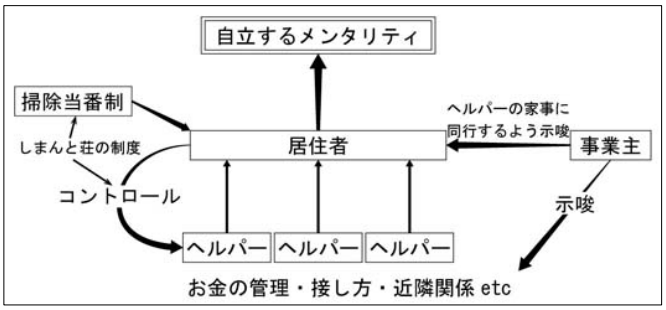

図 7　しまんと荘の居住者のサポート体制

ているわけではなく、もともとの属性や建物のハードとソフトの仕組み、ヘルパーや地域のサポートによって成立している。「しまんと荘」という住まいの存在自体が自立を目指す障害者の受け皿となって、グループホームでも地域施設でもない生活スタイルを創造している。特にヘルパーを自分で管理することやヘルパーの手助けが、自立を促す要因として大きい。また、このように障害者の属性やその程度によらず、みんなが集まって住める建物が存在することや、それによって障害者が積極的に外出することで、地域の人々に認知され、地域の資源を活用したサポート体制を築くことができる。

5. まとめ

表 11 から、シェア居住において、①超越的な立場で居住者を見守り、近隣関係等を管理する人の必要②居住者の属性を考慮に入れて、特定の共同スペースや行為で住人同士をつなぐことが有効だと言える。また、同属性が仲間意識や連帯感を強めることも分かる。さらに、各対象に見られる特性は、平板なシェア居住の在り方に対して、非血縁者で共同生活を送ることで、居住者が地域とつながる社会性を身に付ける、精神的に成長できるといった新たな価値を生み出す場として有用性があることを示している。

表 11　各対象の共通性

	寝屋子制度		甲子ドミトリー		カイラーサ	しまんと荘
	青年	夫婦	学生	高齢者	単身赴任	障害者
属性	同属 同性 同年齢	——	同属 同年齢	同属 同性	同属 同性 同年齢	同属
シェア行為	就寝		入浴		食事	——
生活を管理する人	寝屋親		——		オーナー	事業主 ヘルパー
シェアに見られる特性	教育 地縁		自己啓発		自発性	自立性 外出意欲

1) 日本経済新聞(2013.01.28 朝刊)
2) goo ランキング(2012.09.03)
3) 障害保健福祉研究情報システム/重要な用語の解説

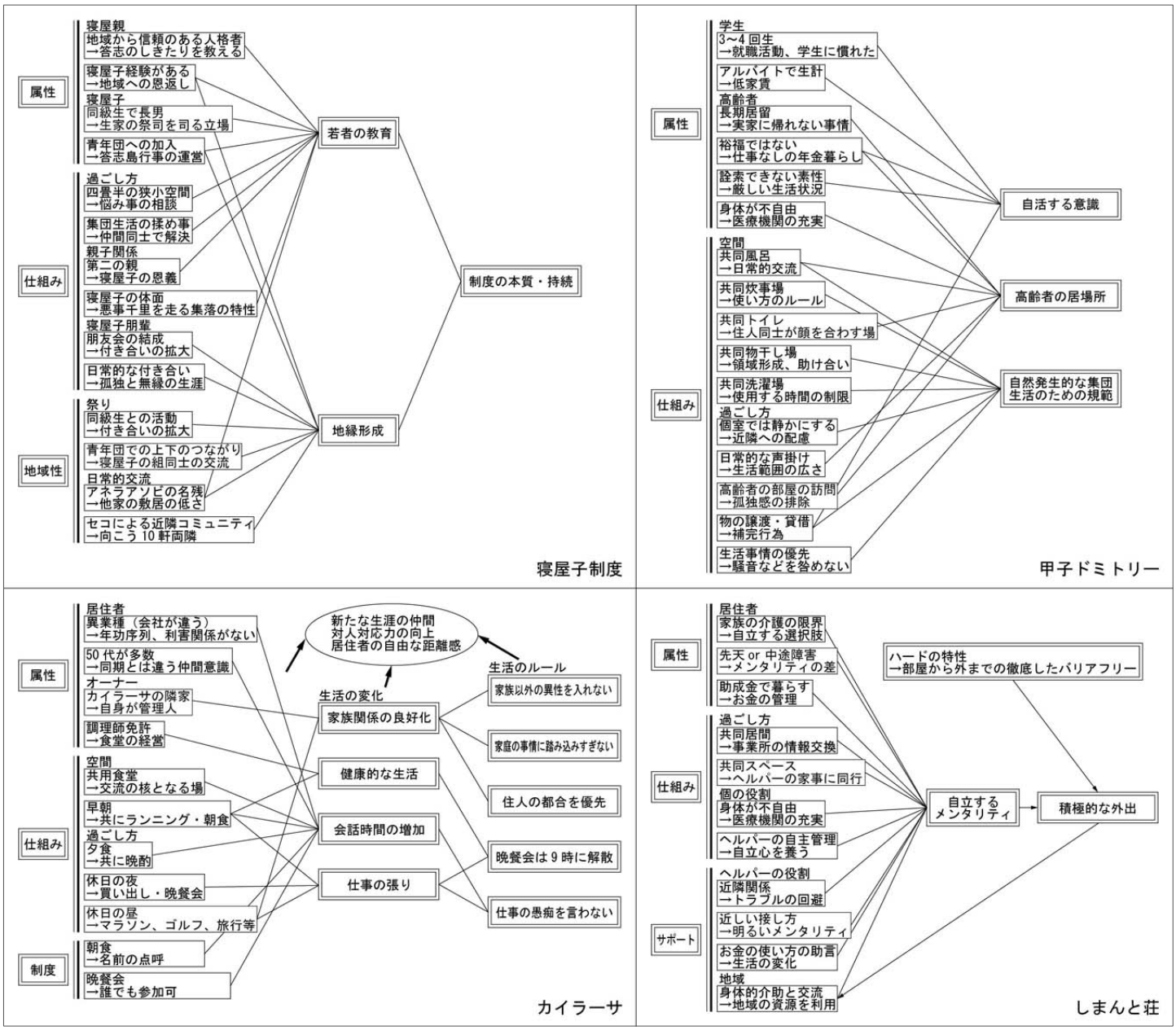

図 8 共同生活の成立要因

討議

討議［　倉方俊輔准教授　］

一番の結論っていうのは、何か生活行為の中の1つのもので繋ぐっていうことが、1 つ有効なんじゃないか。それを管理するような、フラットじゃなくて、超越的な立場の人がいるということが大事なんじゃないか。特化したシェア行為とシェア生活を管理する人達っていうのは、何となく今みたいにまとめられると思うんだけど、シェアから生まれる特性って全部バラバラじゃないですか。だって、自己啓発とか自発性とかを全部社会性に結びつけることは、ちょっと難しい気がするんですよ。だから、一番最後の結論は、どっから出てきたのかちょっとまだ。

回答

自己啓発とか自発性っていう部分は、甲子ドミトリーの場合だとかは、学生が高齢者の、はっきり言ってしまえば貧しい生活を見て、それを自分で感じ取って、どんどん自活していかなければっていう意識に繋げていくようなことを自己啓発って呼んでるんですけど。

返答

それって内的なもんですよね。だから、その最後のところにさらっとさり気なく結論で書いてあったんだけど、あれはちょっと論理が飛んでないですか。この地域の話って全部で成り立つかしら、本当に。僕が言った 2 つの結論だったらば分かるんだけれども、何かその地域の話はちょっと論理が飛んでる気がするのは、気になりました。でもまぁ、全然最初バラバラの対象かなって思ったけど、抽出してるからいいんじゃないかと思いますけどね。

討議［　徳尾野徹准教授　］

一番最初に新聞記事で、最近流行のシェア住宅を批判してたけれども、それとどこが違うんかな。対象にした 4 つの(事例と)。新聞記事も非血縁の人達が住んでるよね。それとどこが違うのかというのを最後結論で示してなかったら、この 4 つの独自性も何か変わったシェアという程度に見えちゃうんで、その辺を説明してください。

回答

この新聞記事だけに関して言うと、この新聞記事には、最後に非血縁者同士だからこそ感情的になりやすいっていうことが書かれていて、だからこそ結論で言った見守る人とか、キーパーソンの存在が必要なんじゃないかっていうことが書かれています。

討議［　嘉名光市准教授　］

例えばこういう背景で言うなら、普通のシェアハウスと言っていいのかよく分からないですけど、普通のシェアハウスなんてあんのかいっていう話になりますが、最近よくあるシェアハウスみたいなのは、調査事例としてあっても良かったのかも知れないですけど。その辺りは、なぜこの 4 事例なんでしょう。

回答

そういったものは、やっぱり住む理由がまず家賃だとか初期費用が安いだとか、そういう経済的な理由が多くて、入居期間も半年だとかっていうのが多かったんですよ。そういうものではなくてもっと自然発生的にやってる共同生活、シェアっていうより共同生活というような言い方をしたものを見ていきたかったっていうのがあります。

討議［　倉方俊輔准教授　］

そこがやっぱり気になりますよね。何かやっぱりそうじゃないんじゃないかなっていうか。シェアハウスがもっと意味があるっていうのを全体的に述べたりとか、シェアハウスっていう枠組みを拡げたりするために、何となくこの事例があるような気がするので。何か今あるものを、それは違いますっていうパターンに結びつくかなって。なんか見えない仮想敵を設定しちゃってる感じがある。経済的問題って全部に多分関わってるし、トラブルが皆無だとは絶対思えないので。それは、トラブルだらけの毎日かも知れないですよね。そういうとこじゃないんじゃないかな。平板なシェアハウスの在り方に対して、もっと拡げるとか。あるいは経済的に捉えられるものに対して、違う価値をちゃんと提示するとかいうこと。何かちょっと最初のあれがずれてるから、ちょっと結論が矮小化して捉えられる気がするのがもったいないなと思って。

回答

自分の中に批判っていう部分はけっこうあって。こういう若者同士のルームシェアみたいな一過性の住まい方を批判したいっていうところから研究がスタートしたんです。それで 4 つの調査対象を選んで、結論がああいう風になったんですけど。

討議［　嘉名光市准教授　］

この研究は、すごく個別の事例も面白いし、良いと思うんですけどね。何でこの 4 事例やねんみたいなところは、突っ込みどころ満載なとこもあるので。まぁ、そこだと思うんですよね。